

怒りの活用 ——レイシズムに応じる女性たち——¹

オードリー・ロード
鈴木 越生 訳

訳者解題

たしかに感情には、素朴なエゴイズムがあり、恐ろしい不安定もある。しかし、一口に感情といってもそれにはさまざまな質の相異があるのであり、人間の本質的な生命につながり、理知や理性の流露の場となり支えとなるのもまた感情や感覚である。(井出 1979: 7)

本稿は Audre Lorde, 1981, “The Uses of Anger: Women Responding to Racism” の全訳である⁽¹⁾。この文章は複数の論集に収録されているが、本稿では *Sister Outsider* のペンギン・クラシックス版所収のものを底本とした (Lorde [1984] 2019: 117-27)。原文が聴衆に呼びかける講演文であるため、本稿でもその性格を表現すべく敬語調で訳した。注釈は、() なしの文末注が原注、() 付きの頁末注が訳者注である (原文では原注が*で示されるが、訳文では文末注にしたため、位置が分かるよう便宜的に番号を振った)。

ロードは 1934 年に生まれ、58 歳を迎えた 1992 年に癌で亡くなった。ニュー・ヨークでカリブ移民の両親のもとに生を受け、大学在学時から活動した詩人・思想家で、「人種をまたいだ結婚をした、黒人レズビアン之母」であった (Lorde [1984] 2019: 132)。このように重層的な自己自認をもつロードは、誰かにわかりやすく分類され定義されることをつねに警戒する——「黒人」「女性」「レズビアン」「母」、そのどれかひとつずつへと還元されて説明されることを。ロードはこの分類の圧力に抗して「自分で自分を定義しなければ、わたし

(1) THE USES OF ANGER: WOMEN RESPONDING TO RACISM by Audre Lorde, Copyright © 1981 by The Estate of Audre Lorde. Permission from The Estate of Audre Lorde c/o Regula Noetzli Affiliate of the Charlotte Sheedy Literary Agency arranged through The English Agency (Japan) Ltd.

にかんする他の人々の空想へとぐしゃっと押しこめられ、生きたまま食われてしまうだろうと学んだ」と言う (Lorde [1984] 2019: 132)。

この重層的立ち位置から発するロードの思想は、いまでも多くの反レイシストやフェミニストを魅了する。とくに、白人中流階級中心のホワイト・フェミニズム⁽²⁾を解体しようという気運のなかで、ロードの存在感は大きい。日本でも近年、ホワイト・フェミニズムの解体・刷新を目指す著作が次々と翻訳されているが、そこにもロードの言葉や思想が息づいているのがみてとれる (たとえば Ahmed 2017 = 2022; Shuller 2021 = 2023)。

こうしていまや一種の古典の位置を占めるロードだが、彼女自身の文章はほとんど邦訳されていない。訳者の知る限り、訳されたものは自伝的小説である『ザミ』の断片に限られる (Lorde [1982] 2018 = 1997)。訳者はこうした現状に鑑み、ロードの文章を訳出して日本語読者に送りだしたいと考え、本論「怒りの活用」を選んだ。というのも、「エロティックなものの活用」(Lorde [1984] 2019: 43-9) と並んで感覚的なものを直接の主題とした本論が、感情や感性を糸口として差異を理解するというロードの思想の肝をよく表していると考えたからである。以下では怒りという主題の広がり、怒りの議論をとおして表現されるロードの差異の思想という2点について順に論じ、解題とする。

第一に、怒りの議論について。ここでは、ロードが自己本位的な罪悪感 (guilt) と怒りの峻別を執拗に強調していることに注意を促したい。道義的な憤りに直面したとき、責められているように感じて反発することもあれば、良心の呵責から罪悪感を抱くこともある。だがいずれにせよ、自分の感情が害されたことや自分の罪の感覚に浸る点で、「自分」に閉じたものである。自己本位的な感情を抱いてはいけなわけではない。ただそれのみでは、相手の声を聴きとり、ともに変化への道筋を探る創造的な契機がうみだされない。怒りの一律な消極的評価に抗し、自己に閉じるのではなく他者との協働と社会変革に向けて怒りを創造的に活用する。これがロードの一貫した問題意識である。

怒りの活用や自己本位的感情との峻別という点は、いまどのように継承・展開されているだろうか。まず、怒り自体の内実注目しそれをより細やかに捉えようとする議論がある。哲学者ミイシャ・チェリーは「ロード流の怒り (Lordean rage)」を、世界を闇雲に敵視し否定する荒れ狂う怒り (rogue rage)、スケープゴートの根絶を目論む一掃する怒り (wipe rage)、受動的で羨みの入り混じる鬱屈したルサンチマンの怒り (ressentiment rage)、自己の

(2) ここで言う「ホワイト」は肌の色としての「白」を示すというより、社会の中心にいるがゆえになにも印づけられず「ふつう」に生きていける特権性としての「無標さ」を表している。したがって、たとえば白／黒の区分が強固な合州国ではこの2つの意味はおおいに重なるが、日本で「ホワイトネス」を考える場合はずれることになる。

苦しみには敏感に怒るが他者の苦しみには鈍感な自己本位的怒り (narcissistic rage) から切りわけて概念化することで、それがエネルギーの源泉となって変化につながる怒りだという点を明確化する (Cherry 2021: 16-27)。次に、自己本位的感情との区別は、ホワイト・フェミニズム批判において継承されている。社会学者アリソン・フィップスが指摘する傷ついた (wounded) 自己としてのホワイトな主体性は、ロードが指摘した罪悪感と同様の論理の内にある。方向性こそ異なるが、自分を受け身に置いたままの「申しわけない」、「傷ついた」という感情はいずれも、罪や傷を負わせる大元たる社会構造にメスを入れないままわたしたちを立ちどまらせてしまう (Phipps 2020: 67-72)。さらには怒りもまた、それを発する自分の足元 (人種・階級的立ち位置) を省みないままでは、主流社会のサークルからはみ出す者の怒りや苦しみを捨ておき、かれらに巻きぞえ被害を与えてしまうことをフィップスは指摘する。たとえば、「性暴力を受けたくないなら売女 (slut) のような格好をするな」という言葉を逆用した反性暴力の SlutWalk 運動は、奴隷制と結びつき黒人女性を侮蔑する際に使われてきた slut の使用に対する黒人女性の戸惑いと拒否に気づかなかった (Phipps 2020: 118)。

だがここで同時に、ロードの怒りの議論が、単にホワイト・フェミニズムを批判するためのものではなかった点も強調したい。この点を理解することが、第二の論点、つまりロードの差異の思想を理解することにつながってくる。彼女の怒りの議論は、単純に白 (無色) / 黒 (有色) や異性愛 / 同性愛といったカテゴリの区分を本質主義的に捉え、被抑圧者の立場から抑圧者を道徳的に糾弾するものではない。そのように受けとられることに対して、ロードは本論の結論部で明確に抵抗している。

ロードにとって怒りは、他者の糾弾のためにあるのではなく、他者との差異に出会う端緒、異なる立ち位置からみえる経験世界を照らす光なのだ。ここで言う差異とは、「女性」や「黒人」といった集団的なカテゴリとそのまま同じものではない。結論部で自省的に述べられるように、ロードは有色のレズビアン女性だが大学の給与で子どもを養うことのできる立場にあり、その立場は同じ有色レズビアン女性であっても働けない女性、子どものできない / いけない女性、同性愛者であることを隠している女性とは異なっている (訳文 p. 94)。つまり、「有色レズビアン女性」というカテゴリが自動的にその内部での連携を保証してくれるわけではないのだ。

だがこの意味での差異を重視し立場ごとに生活経験が異なるということを言いたてれば、人々を無限に細分化して、互いに分かちあえるものがなくなるほどに個別化してしまうのではないか。つまり社会変革を求める運動に必要な連携 (coalition) ではなく、分断をうみだしてしまうのではないか。そうではない、逆だ、とロードは言う。差異があるにもかかわらずではなく、差異の認識を基礎としてこそ連携は可能になる (Hong 2015: 8)。というのも上

述したように、差異を理解しないまま「女性」というカテゴリを一括りにしてしまう運動は、誰かの経験を当然視して別の誰かの経験を排し、異なる立ち位置同士の連携を難しくしてしまうからだ。ロードが求める「女性」や「黒人」というまとまりは、皆が同じ経験をもつカテゴリ集団ではなく、さまざまに異なる立場と経験をもつ人々の繊細な連携なのである (Hong 2015: 4-5)。

怒りは、このような連携に入るための門となりうる。本論のなかで同じ反レイシズムの闘いを共有していると決めつけたかどでロードを責める有色女性の怒りが、「わたしが学ぶべきなにかを教えてくれる」(訳文 p. 89) ものと評されるように、他者の怒りは自分の蒙昧を知らせ、異なる立ち位置からみえる別の世界へのヒントをくれる。誰かがなぜ怒っているのか、なにに怒っているのか、その怒りは彼女のどのような生活経験や実感に根ざしているのか。怒りを契機として生じるこれらの問いを追いかけていけば、「他の女性の顔についての自分のヒールの跡」(訳文 p. 94) がみえるようになり、他者への抑圧に手を貸さない形で彼女との協働を築くにはどうすればよいかを探っていける。

これが、ロードが怒りに見出す可能性である。異なる立ち位置から生じる怒りは、他者の拒絶ではなく、他者に差異をわかってもらおうと差しのべられる手なのだ。ロードは本論の講演以前に一度、もう二度と白人女性に向けてレイシズムについて語るのはやめる、と心に決めたことがあったという (Lorde [1984] 2019: 61)。その後でなお今一度レイシズムに対する怒りとその活用方法を白人女性に向けて語った本論は、怒りながら手を伸ばしつづけずにはいられなかった彼女のあがく姿をよく表している。「怒りの活用」はいまも、わたしたちに怒りの使い方を考えさせるべく、手を差しだしている。

参考文献

- Ahmed, Sara, 2017, *Living a Feminist Life*, Durham; London: Duke University Press. (飯田麻結訳, 2022, 『フェミニスト・キルジョイ——フェミニズムを生きるということ』人文書院.)
- Cherry, Myisha, 2021, *The Case for Rage: Why Anger Is Essential to Anti-Racist Struggle*, New York: Oxford University Press.
- Hong, Grace Kyungwon, 2015, *Death Beyond Disavowal: The Impossible Politics of Difference*, Minneapolis; London: University of Minnesota Press.
- 井出文子, 1979, 『自由 それは私自身——評伝・伊藤野枝』筑摩書房.
- Lorde, Audre, 1982, *Zami: A New Spelling of My Name*, Persephone Press. Reprinted: 2018, London: Penguin Books, 24-32, 207-15. (有満麻美子訳, 1997, 『『ザミ 私の名の新しい綴り』より』今福龍太・沼野充義・四方田犬彦編『世界文学のフロンティア 5 私の謎』岩波書店, 163-89.)

———, 1984, *Sister Outsider*, New York: Crossing Press. Reprinted: 2019, London: Penguin Books.

Phipps, Alison, 2020, *Me, Not You: The Trouble with Mainstream Feminism*, Manchester: Manchester University Press.

Shuller, Kyla, 2021, *The Trouble with White Women: A Counterhistory of Feminism*, New York: Bold Type Books. (飯野由里子監訳・川副智子訳, 2023, 『ホワイト・フェミニズムを解体する——インターセクショナル・フェミニズムによる対抗史』明石書店.)

レイシズム。ある人種が他のすべての人種にうまれながらにして優越し、それゆえかれらを支配する権利をもつのだという、明に暗に示される信念。

女性たちがレイシズムに応じる⁽³⁾。わたしは怒り (anger) でもってレイシズムに応じます。わたしは自分の人生の大部分を、レイシズムに対する怒りとともに生きてきました。怒りをときに無視し、ときに糧とし、怒りがわたしの物事を見通す力をだめにしてしまう前に、それを使うことを学びました。かつては怒りの重みを恐れて、沈黙のなかでそうしたのです。[ですが] 怒りへの恐れは、わたしになにも教えてくれなかった。みなさんがこの怒りに抱く恐れも、みなさんになにも教えてはくれないでしょう。

レイシズムに応じる女性たちとは、怒りに応じる女性たちを意味します。排除に対する怒りに。疑われもしない特権、人種的歪曲に対する怒りに。沈黙、虐待、ステレオタイプ化、防御的な姿勢 (defensiveness)、名前の呼び間違い、裏切り、取りこまれてしまうこと (cooptation) に対する怒りに。

わたしの怒りは、人種差別的な態度と、そこから生じる行為や思いこみへの応答です。もしみなさんが他の女性たちを扱うやり方にそうした態度が反映されているなら、わたしの怒りとそれに伴うみなさんの恐れは、成長のために活用できる舞台照明になります。わたしが怒りを表現することを学びながら、それを自分の成長のために活用したのと同じように。ですがそうするのは矯正のためにであって、罪悪感 (guilt) のためにではありません。罪悪感と防御的な姿勢はブロックのように積み上がって、わたしたち皆が越えられずにもがき苦しむ壁をつくります。それらは、わたしたちの将来にとってなんの役にも立ちません。

わたしはこの話を理論的な議論にはしたくないので、[わたしが見聞きしてきた] 女性同士のやり取りの例をいくつか挙げて、以上の論点を例示してみせましょう。時間の都合で手短かに述べますが、もっと多くの経験があったことを知っておいてください。

たとえば：

・わたしが直接的で特定の怒りから学会で発言すると、白人女性が言います。「あなたがどう感じるか教えてほしいけれど、あんまりキツク言わないで。そうしないと聞くことができないの」。けれど彼女を聞くことから遠ざけているのは、わたしの言い方でしょうか？ それとも、自分の人生が変わってしまうかもしれない、というメッセージの脅威 [をわた

(3) 「女性たちがレイシズムに応じる (Women Respond to Racism)」は、ロードがこの基調講演をおこなったときの全米女性学会大会のテーマだった。

しの発言から受けとるから] でしょうか？

- ・ある南部の大学の女性学プログラムが、黒人と白人の女性にかんする1週間にわたるフォーラムの後で、黒人女性（訳注：ロードを指す）を朗読に招くときのこと。「この1週間からあなたたちはなにを得ましたか？」とわたしは尋ねます。一番声の大きい白人女性が言うには、「わたしは多くを学んだと思います。いまでは黒人女性がわたしのことを、ずっとよく、本当に理解してくれていると感じます。彼女たちはわたしがどこから来ているのか、よりよくわかっています」。まるで彼女を理解することが、レイシズム問題の核にあるかのような言いぐさです。
- ・あらゆる女性の生活の悩みと将来の可能性に取りくむ、と公言する女性運動が15年間おこなわれたあとで、わたしは未だに、行く先々のキャンパスで耳にします。「わたしたちはどうやったらレイシズムの問題に取りくめるでしょうか？ 有色の女性が誰も出席してくれませんでした」。あるいはこの発言の裏返しで、「自分たちの作品を教えることのできる〔有色女性の〕教員が、わたしたちの学部には誰もいないのです」。言いかえれば、レイシズムは黒人女性の問題、有色女性の問題であって、わたしたち〔黒人女性・有色女性〕だけがそれについて議論できるというわけです。
- ・「怒れる女性たちのための詩（Poems for Women in Rage）」²と題されたわたしの作品を朗読した後、白人女性が尋ねてきます。「あなたは、どうすればわたしたちがわたしたちの怒りと直接向きあえるのか、ということには関わらないのですか？ それはとても重要だと感じるのですが」。わたしは訊き返します。「あなたはあなたの怒りをどう使うのですか？」そして、彼女が自分自身の崩壊にわたしを巻きこもうとする間もなく、そのぼかんとしたまなざしに背を向けなければなりません。わたしは、彼女に代わってその怒りを感じてあげるために存在するわけではないのです。
- ・白人女性が黒人女性との関係性を検証し始めていますが、それでもなお彼女たちが、子ども時代に行き違った浅黒い子どもたち、あの愛すべき子守女（nursemaid）、あのたまに会った二級のクラスメイトとだけ向きあいたい、と言うのをしょっちゅう耳にします。つまりはこのような、かつて謎めいていて好奇心をそそるもの、あるいは害のないものの優しい記憶とだけ。ラスタス（Rastus）⁽⁴⁾やアルファルファにけたたましく笑ったこと、わたしがそこに座っていたから公園のベンチに敷かれたママのハンカチが発していた鋭いメッセージ、エイモスン・アンディ（Amos 'n Andy）⁽⁵⁾の忘れられない、非人間化するような

(4) 陽気な黒人というステレオタイプ的一种で、白人が黒人になりすまして喜劇的に演じる minstrel・ショーにおいて、お馴染みのキャラクターとなった。

(5) アメリカ合州国のコメディ・ショーで、1928年からラジオ番組として始まり、1960年代まで人気を博した。minstrel・ショーによってつくられてきた典型的な黒人像を踏襲した。

似顔絵とパパの笑えるおとぎ話。みなさんは、こうしてつくられた子ども時代の思いこみは避けて通るのです。

- ・1967年にイーストチェスターで、2歳の娘をショッピング・カートに乗せて押していると、母親のカートに乗った小さな白人の女の子が興奮して叫びます。「見てママ、赤ちゃんメイドだ！」母親はしーっと黙らせますが、間違いを正しません。そして〔いま〕15年後に、レイシズムにかんする会議の場で、みなさんは未だにこの話を可笑しく思える。ですがわたしには、みなさんの笑いは恐怖と居心地の悪さに満ちたものに聞こえます。
- ・ある白人の学者が、非黒人の有色女性による論集³が出たのを歓迎するとき。「これで黒人女性のキツさとつき合わずにレイシズムとつき合える」、と彼女はわたしに言うのです。
- ・女性の国際的な文化的集会で、著名な白人のアメリカ女性詩人が有色女性の作品の朗読に割りこんで自分の詩を朗読すると、すぐに「重要なパネル」に向けて急いで出ていきます。

学界の女性たちが本当にレイシズムについて対話したいのであれば、他の女性たちのニーズと生活環境を認識する必要があります。学者の女性が「払えない」と言うなら、それは自分に使えるお金をどう使うか選択しているのだと言っているかもしれません。けれど福祉を受ける女性が「払えない」と言うなら、それは1972年⁽⁶⁾に最低限生活していけるだけのお金でなんとかやりくりしていて、食べるものにも十分にありつけないことがざらだと言っているのです。しかし全米女性学会は、ここで1981年にレイシズムへの応答を掲げる大会を開いているにもかかわらず、発表やワークショップを望んだ貧しい女性たちや有色の女性たちの参加費免除を拒んでいます。これによって、多くの有色女性たちがこの大会に参加できませんでした。そのなかにはたとえば、家事労働に賃金を求める黒人女性たち（**Black Women for Wages for Housework**）のウィルメット・ブラウンがいます⁽⁷⁾。今回もまた、学界がその閉じられた内輪で生活について議論する場に過ぎないのでしょうか？

こうした態度をよく知っている白人女性の参加者たちに向けて、しかしなにより、このよ

(6) ここで1972年という年号を出しているのは、後述の「家事労働に賃金を」結成年を踏まえてのことと思われる（注7参照）。

(7) 「家事労働に賃金を」は、1972年にマリアローザ・ダッラ・コスタとシルヴィア・フェデリーチ、ブリジット・ガルチエ、セルマ・ジェイムスによって創設された国際ネットワークで、資本主義的社会関係のなかで女性が無賃の再生産労働を搾取されてきたことを問題化した（伊田・伊藤 1986: 255-7）。「家事労働に賃金を求める黒人女性たち」はこれを受けて結成された組織で、合州国のニュー・ヨーク、イギリスのブリストルに拠点を置いて活動した。当組織の最初の会報によれば、1975年に「ロンドン家事労働に賃金をキャンペーン」の年次大会において構想されたという（**Black Women for Wages for Housework** 1977: 1）。ブラウンはこの組織の創設者のひとりで、反戦運動にも関わり、『黒人女性と平和運動』（*Black Women and the Peace Movement*, 1984年）を著している（Chappel 2021）。

うな扱いに数えきれないほど直面しながら生きてきた有色の姉妹たち皆に向けて——〔かつての〕わたしのよう未だにその憤怒を抑えつけて震わせている、あるいはときに、わたしたちが憤怒を表すのは役に立たず亀裂をもたらす（2つの最もよくある非難）のではないかと疑問を投げかけてくる、有色の姉妹たちに向けて——わたしは怒りについて、わたしの怒り、それが支配する領域をくぐり抜ける旅路でわたしがなにを学んだかについて話したいと思います。

すべてのものは使うことができる／無駄なものを除いて／（あなたはこのことを／思い出す必要がある。なにかを壊してしまったと責められたときに。）⁴

あらゆる女性は怒りを豊富に貯めこんでいて、それはその怒りをもたらした個人的・制度的な抑圧に抗して活用するものなのです。正確に焦点を合わせれば、怒りは進歩と変化に役立つ強力なエネルギー源になりえます。そして変化と言うときわたしが意味しているのは、単なる立ち位置の入れかえやその場しのぎの緊張緩和でも、笑ったり気分よく感じる能力でもありません。〔そうではなく、〕わたしたちの生活の根底にある思いこみを、基本的・根本的に変えることについて話しているのです。

わたしは白人女性たちが人種差別的な発言を聞いて、言われたことに憤り、烈しい怒りでいっぱいになって、〔にもかかわらず〕怖いがために黙ったままにいる、という場面をみてきました。その表出されなかった怒りは、彼女たちのなかで爆発しそこなった装置のように残って、しばしば、その後レイシズムについて語る有色女性に会ったときに吐きだされます。

しかしながら、わたしたちの展望と将来のために表現され行為へと転換された怒りは、解放的で力づけてくれる明確化の行為なのです。というのも、この痛みに満ちた転換の過程でこそ、わたしたちは誰が味方で、誰と深い差異があって、誰が本当の敵なのかを特定するからです。

怒りには情報とエネルギーが積みこまれています。有色女性について語る時、わたしは、黒人女性だけのことを言っているわけではありません。黒人ではなく、彼女のレイシズムとの闘いがわたしのそれと同じだと決めつけることで彼女の存在を見えなくした、とわたしを責める有色女性。この女性はわたしが学ぶべきなにかを教えてくれるのであって、そうでなければ、わたしたちはどちらも互いに真実を争って無駄に消費してしまうでしょう。もしわたしが、知ってか知らずかわたしの姉妹の抑圧に加わっていて、彼女がそう指摘するのなら、彼女の怒りにわたしの怒りで応えることは、わたしたちのやり取りの本質を反応で覆い隠すに過ぎません。それはエネルギーの無駄づかいです。〔とはいえ〕確かに、わたしが共有しない、あるいはわたし自身が加担してきた苦悩を言葉にする他の女性の声にじっと聴きいるのは、とても難しいことです。

ここでわたしたちは、わたしたちが女性として敵にとり囲まれていることをよりあからさまに思いおこさせる物事から、離れた場所で語っています。このことによって、わたしたちにのしかかってくる力の大きさと複雑さや、わたしたちを取りまく環境のうち最も人間的なものすべてが見えなくなってしまうとは限りません。わたしたちは、政治的・社会的真空のなかでレイシズムを検証する女性としてここにいるわけではないのです。〔そうではなく〕わたしたちはレイシズムとセクシズムが主要な位置にあり、確立され、利潤の必要な支えとなっているシステムに歯向かって動いています。レイシズムに応じる女性たちというのは危険な話題であるため、現地のメディアがこの大会の信用をなくさせようとするなら、かれらは〔この話題から〕注意を逸らすべく、レズビアン・ハウジングの提供に焦点を合わせます。まるで『ハートフォード・クーラント』⁽⁸⁾が、女性たちが実際に生活のあらゆる抑圧的な条件を検証し変えようとしていると明らかにならないよう、レイシズムというここで選ばれた議題にあえて言及しないかのように。

主流のメディアはレイシズムに応じる女性たち、とりわけ白人女性たちを求めています。それはレイシズムが、夕刻や皆が感じる寒さのように、みなさんの存在に織りこまれた変えられない所与として受け入れられることを望んでいます。

というわけで、わたしたちは対立と脅しを背景に活動していますが、その原因はわたしたちのあいだにある怒りでは決してありません。そうではなく、あらゆる女性、有色の人々、レズビアンとゲイの男性、貧しい人々に向けられるとげとげしい憎しみなのです。それはわたしたちのうちで、抑圧に抗し、連携と効果的なアクションに向けて進みながら、互いの生活のどこが特異なのかを検討しようとしている者すべてに向けられます。

女性たちのあいだでレイシズムについて議論するのなら、怒りを認め、その活用を論じなければなりません。この議論は決定的に重要なので、直接的で創造的なものに違いありません。怒りへの恐れによって注意を逸らされたり、本音を掘りおこすという骨の折れる仕事の手前で決着をつけるよう誘惑されてはなりません。わたしたちはレイシズムという議題の選択と、その内でもつれ合うさまざまな怒りを真剣に考えなければなりません。というのも間違いなく、相手はわたしたちや、わたしたちがここでやろうとしていることへの憎しみを真剣に考えているからです。

そして、わたしたちはしばしば苦しむ顔に互いの怒りをくまなく読みとろうとしています。覚えておいていただきたいのは、夜にはドアに鍵をかけるよう、ハートフォードの通りをひとりでおらつかないようみなさんに注意させるのは、怒りではないということです。通

(8) この講演がおこなわれたコネティカット州最大の日刊紙。後にも出てくるハートフォードは、同州の州都。

りで待ち伏せしているのは憎しみ、つまり、わたしたちが学問のレトリックにふけるだけでなく変化のために実働すると、わたしたち皆を壊滅させようとするあの衝動なのです。

この憎しみとわたしたちの怒りはおおいに異なります。憎しみはわたしたちの目標を共有しない人々の激高で、死と破壊を目的とします。怒りは仲間同士のあいだにある歪みを嘆く感情で、変化を目的とします。ところが、わたしたちの時間は短くなってきています。わたしたちは性別以外のいかなる差異も、破壊の理由としかみなさないよう育てられてきました。だからこそ黒人と白人の女性たちにとって、互いの怒りを否定せず、それに感化され、沈黙や罪悪感抜きに向きあうということはそれ自体、異端で新たに生まれ出るアイディアなのです。それは仲間同士が〔互いの〕差異を検討し、歴史がわたしたちの差異の周りにつくりあげてきたさまざまな歪みを変えようと、共通の土台のうえに集うことを意味します。というのもこれらの歪みこそ、わたしたちを隔てるものだからです。そしてわたしたちは自問しなければなりません。このすべてから利益を得るのは誰なのか、と。

アメリカの有色女性たちは、怒りのシンフォニーのなかで育ってきました。黙らせられること、選ばれないことに対する怒り。そしてわたしたちが生き残るとき、それは世界がわたしたちを人間として欠けていると当然視し、奉仕の対象外であるわたしたちの存在そのものを憎むにもかかわらずだ、と知ることに対する怒り。わたしが不協和音 (*cacophony*) ではなくシンフォニー (*symphony*) と言うのは、わたしたちが憤怒を、それが互いを切り裂かないように調整する (*orchestrate*) ことを学ばなければならなかったからです。わたしたちはそれらを通り抜け、日々の生活のなかで強さ、力、洞察を得るために使うことを学ばなければならなかった。この難しい教訓を学ばなかった人々は、生き残りませんでした。ですからわたしの怒りの一部はいつでも、〔そのようにして〕倒れた姉妹たちへ捧げる供えの酒でもあるのです。

人種差別的態度から生じる行いが変化しないときの憤怒と同様に、怒りはこうした態度に対する適切な反応です。ここにいる女性たちのうち、自身の検証されていない人種差別的態度よりも有色女性の怒りを恐れる方々に問います。有色女性の怒りは、わたしたちの生のあらゆる側面を染める女性嫌悪よりも脅威となるものでしょうか？

わたしたちを破滅させるのは他の女性たちの怒りではなく、拒絶なのです。〔その怒りを前にして〕じっとしていること、怒りのリズムを聴きとること、その内で学ぶこと、〔怒りが〕提示される仕方を越えてその内実へ踏み入ること、その怒りをエンパワーメントの重要な源泉として活用することに対する拒絶です。

わたしはみなさんの罪悪感、傷つけられた感情、応答の怒りに場所を空けるためにわたしの怒りを隠しておくことはできません。というのもそうすることは、わたしたちの労苦すべ

てを辱め、矮小化するからです。罪悪感は怒りへの応答ではありません。それは自分自身の行い、あるいはなにかを行っていないことへの応答なのです。もしそれが変化につながるのなら有益になりえます。というのもそうなれば、それはもはや罪悪感ではなく、知ることの始まりだからです。しかしあまりに多くの場合、罪悪感は無力、コミュニケーションを損なう防御的な姿勢の別名に過ぎません。それは無知と、現状のあるがままの継続を守るための装置、つまりは無変化の究極の防護壁となります。

ほとんどの女性たちが、怒りに建設的に向きあう手立てを發展させてきませんでした。過去のCR（訳注：コンシャスネス・レイジング）⁽⁹⁾の諸グループは、大部分が白人でしたが、大抵は男性の世界に向けて、怒りをどう表現するかを扱っていました。そしてこれらのグループは、抑圧の諸条件を共有する白人女性たちで構成されていました。〔そのため〕大抵の場合、女性たちのあいだにある本当の差異、つまり人種、肌の色、年齢、階級、性的アイデンティティといった差異を明確化する試みはほとんどなかったのです。当時は抑圧者としての女性、という自己の矛盾を検討する明らかな必要がありませんでした。怒りを表現する活動はありましたが、互いに向けられた怒りについてはほとんどありませんでした。他の女性たちの怒りを扱う手立てとしては、罪悪感という覆いの下でそれを避けるか、逸らすか、それから逃れるか以外には發展されなかったのです。

わたしはみなさんのにしても自分のにしても、罪悪感の創造的な使い道をもちあわせていません。罪悪感は、見識ある行いを避ける別の方法に過ぎません。明確な選択をする喫緊の必要から、大地を潤すとともに木々を折り曲げてしまえる迫りくる嵐から、時間を稼ぐ別の方法に過ぎないのです。わたしがみなさんに怒りのただなかで語りかけるとしても、少なくとも語りかけてはきたのです。わたしはみなさんの頭に銃を突きつけ、通りで撃ち殺してきたわけではありません。わたしは血を流すみなさんの姉妹の体を見て、「そんな目に遭うなんてどんなことをしたの？」と尋ねてきたわけではありません。これはメアリ・チャーチ・テレルが、当時妊娠した黒人女性がリンチされお腹の赤ちゃんが引き裂かれた話をしたときに、2人の白人女性たちから返ってきた反応でした。それは1921年、アリス・ポールがすべての女性への修正第19条の施行に公的に賛同することを拒否したすぐ後のことでした——有色女性がこの修正をもたらすのを手伝ってきたにもかかわらず、彼女たちの包摂を支

(9) *consciousness raising*（意識高揚）とはフェミニズムの小規模な集まりで、1960年代の運動で重要な役割を担った。「個人的なことは政治的なこと」というスローガンを体現するように、これまで家庭外で出会う場を制約されてきた女性たちが顔を合わせて互いの経験を共有し、ともに各人の問題が社会構造の問題でもあることに気づいていく場であった。

持しないことによって⁽¹⁰⁾。

女性たちのあいだにある怒りがわたしたちを殺すことはありません。怒りを正確に明確化でき、言い方に対して自分たちを守るのと少なくとも同じくらいの熱意をもって、言われていることの内容を聴きさえすれば。怒りに背を向けるとき、わたしたちは洞察にも背を向け、〔有色女性にとっては〕命取りなものとして、〔白人女性にとっては〕安全なものとしてすでに馴染みのある〔社会〕設計だけを受けいれると言うことになります。わたしはその限界とともに、自分にとっての怒りの有用さを学ぼうとしてきました。

恐れるように育てられてきた女性たちにとって、あまりに多くの場合、怒りは消滅の脅威となります。男性によって築かれた残酷な力の構造のなかで、わたしたちは自身の生が家父長権力の恩恵にゆだねられたものであると教えられました。他者の怒りはなんとしても避けるべきものだったのです。というのも、怒りから学べることはなにもなくただ痛みを得るだけ、自分たちがするはずのことをしてこなかった、欠陥のある悪い女の子たちだったと判断されるだけだったからです。そして自分の力のなさを認めればもちろん、どんな怒りもわたしたちを壊してしまえます。

ですが女性の強さというのは、わたしたちのあいだにある差異を創造的なものとして認め、歪みに立ち向かうことにあるのです。自分たちの責ではなしに引き継いでしまっただが、いまやわたしたちが変える番にある歪みに。女性たちの怒りは差異をつくり変え、洞察を経て力にしていくことができます。というのも、仲間同士のあいだにある怒りは破壊ではなく変化をうみ、それがしばしば引きおこす不快さと喪失感とは致命的なものではなく、成長の兆しだからです。

わたしは怒りでもってレイシズムに応じます。怒りは、それが語られず、誰にとっても使えないときにだけ、わたしの生を裂いて蝕んできました。それは〔他方で〕、黒人女性の作品と歴史が霞にすら過ぎない、灯りも学びもない教室で役立ってもきたのです。怒りは、わたしやわたしの仲間たちの経験に恐れと罪悪感の新しい理由を見出すだけの白人女性たちか

(10) テレル、ポールともに、合州国の女性参政権運動で活躍した活動家。テレルたち有色女性の活動家は、1916年に結成された全米女性党(National Woman's Party)のリーダーであったポールに対し、有色女性の包摂を求めた。具体的には本文にあるように、白人だけでなくすべての女性に参政権を与える憲法修正第19条への支持を求めたが、拒否された。

このようにポールをはじめとして有色女性に対する理解のない女性党のメンバーたちに対し、テレルがその悲惨な現実経験を伝えようともちだしたのが、リンチのエピソードであった。テレルの日記によると、これは南部のジョージア州で1918年に、夫をリンチから守ろうとしたメアリ・ターナーという女性が出産2か月前にリンチされ、赤子を引き裂かれて殺されたという出来事である。これに対して本文にあるように、白人のフェミニストたちからは「なにをしたんですか?」「当然なにかしたんでしょう」といった心無い言葉が浴びせられたという。以上、Parker (2020)による。

ら向けられる、理解なき眼の氷域のなかで、〔自身を焚きつけ身を暖める〕炎として役立ってきました。ですからわたしの怒りは決して、自身の蒙昧に対処しない言い訳でも、行いの結果から身を引く理由でもないのです。

有色女性が、白人女性との接触の大半に編みあわされる怒りについて口を開くと、「希望のない雰囲気をつくりだしている」、「白人女性が罪悪感から抜けだすことを妨げている」、あるいは「信頼の置けるコミュニケーションと行いの邪魔をしている」とよく言われます。これらはすべて、わたしが過去2年以内にこの学会のメンバーたちから受けとった手紙から直接引用したものです。ある女性は、「あなたは黒人でレズビアンだから、苦しみの道徳的な権威でもって語っているようにみえます」と書いていました。ええ、確かにわたしは黒人でレズビアンですが、わたしの声にみなさんが聞くのは憤怒であって、苦しみではありません。怒りであって、道徳的な権威ではありません。そこには違いがあるのです。

言い訳や脅しの盾でもって黒人女性の怒りから顔を背けることは、誰にも力を与えません——それは人種を考慮に入れない態度、問われない特権の権力を、破られず無傷のままに保存する別のやり方に過ぎないのです。罪悪感とは客体化（objectification）の別の形態でしかありません。抑圧された人々はいつも、もう少しだけ手を伸ばして、蒙昧と人間性の隔たりを架橋するよう求められています。黒人女性は他の人々の救済や学びに役立つようにだけ、自らの怒りを使うことを期待されます。しかし、そんな時期はもう過ぎたのです。わたしの怒りはわたしにとって痛みを意味してきましたが、生き抜くことを意味してもきました。明晰さを求める旅路のなかで、少なくともそれに代わるだけの力をもつなにかがあると確信するまでは、怒りを手放さないでいようと思います。

ここにいる女性のだれが、自らの受ける抑圧に熱中するあまり、他の女性の顔についての自分のヒールの跡がみえないのでしょうか？ どんな女性の抑圧の条件が、自己検証の寒風から逃れて正しさの囲いに入っていくチケットとして、彼女にとって大切で必要なものになったのでしょうか？

わたしは有色のレズビアン女性で、大学で働いているために子どもたちにいつも食べさせることができます。もしかれらの満たされたお腹によって、仕事をみつけれないために子どもが食べていない、あるいは家庭での中絶や不妊手術のために体内がだめになって子どものいない有色女性との共通性を、わたしが認識できないのなら、子どもをつくらないことを選ぶレズビアン、同性愛嫌悪のコミュニティが彼女の生活の唯一の支えであるために同性愛者であることを明かさないままにいる女性、また別の死を迎える代わりに沈黙を選ぶ女性、わたしの怒りが彼女自身の怒りを暴発させやしないかと怯える女性を、認識できないのなら、彼女たちのことを自分自身の別の顔として認識できないのなら、それぞれの抑圧にだけでな

く、自分自身の抑圧にも手を貸していることになります。であればわたしたちのあいだに立ちだかる怒りは、罪悪感による言い逃れやさらなる分離のためにではなく、明晰さと互いを力づけることのために使われなければなりません。その束縛がわたし自身のそれとおおいに異なっていようと、あらゆる女性が自由でない限りわたしは自由ではありません。そして有色の人がひとりでも鎖に繋がれたままである限り、わたしは自由ではありません。みなさんの誰しもがそうなのです。

わたしはここで、破滅させることではなく生き抜くことを決意した有色女性として発言しています。いかなる女性も、彼女の抑圧者の心理を変える義理はありません。たとえその心理が別の女性に血肉化されていてもです。わたしは狼の唇の怒りを吸いあげて、食べ物も姉妹も方位もない場所を照らし、そこで笑い、身を守り、火を熾すために使ってきました。わたしたち〔有色女性〕は、聖なる赦しを与える女神でも女主人でも宮殿でもありません。裁きの光る指先でも、鞭打ちの道具でもありません。わたしたちは、自分たち〔が属するはず〕のウーマンズ・パワー〔運動〕につねに押し返される女性なのです。わたしたちは動物の骸を使うように怒りを使うことを学び、痣をつけられ打ちのめされ変わりながら生き抜いて成長し、アンジェラ・ウィルソンの言葉で言えば、進みつづけているのです⁽¹¹⁾。非有色の女性たちとともに、あるいは彼女たち抜きに。わたしたちは怒りを含めて、それを求めて闘った強みをなんでも使って、すべての姉妹たちが成長できて子どもたちが愛することができ、別の女性の差異と驚き（wonder）に触れて出会うことの力が最終的には破壊の要求を越えていくような世界を定め、つくりあげるのを手助けします。

というのも、疫病に侵された液体のようにこの世界に滴りおちているのは、黒人女性の怒りではないからです。ロケットを打ちあげ、1秒に6万ドル以上もミサイルや他の戦争と死の代理人に費やし、都市で子どもたちをなぶり殺し、神経ガスや化学爆弾を積みあげ、わたしたちの娘たちと大地を犯しているのは、わたしの怒りではありません。蒙昧な、非人間化する力へと蝕まれてゆくのは、黒人女性の怒りではありません。わたしたち皆を壊滅しようと躍起になるこの力に抗するには、わたしたちがもっているもの、つまりこれから生きて活動していく諸条件を検証し再定義する力でもって対峙するしかありません。それは痛みを伴う怒りに怒りを、重い石に石を重ねながら、命を与えあう差異の未来を思い描き、わたしたちの選択を支える大地を再構築する力です。

(11) ここで言及されるウィルソンは、同時期にニュー・ヨークで活動していた黒人レズビアン・フェミニストの詩人を指すと思われるが、彼女のどの言葉を引いているのかはわからなかった。ウィルソンのプロフィールについては、レズビアン誌 *Sinister Wisdom* の20号に彼女の詩が掲載された際の著者紹介欄を参照（Cliff and Rich eds. 1982: 110）。

わたしたちは、わたしたちと会い、面と向きあって、客体化と罪悪感を乗り越えていくすべての女性を歓迎します。

原注

- 1 1981年6月、コネティカット州ストーアズ、全米女性学会（National Women's Studies Association）大会での基調講演。
- 2 この一連の詩の一篇は、*Chosen Poems: Old and New* (W.W. Norton and Company, New York, 1982), pp. 105-108 に収められている。
- 3 *This Bridge Called My Back: Writings by Radical Women of Color* edited by Cherrie Moraga and Gloria Anzaldúa (Kitchen Table: Women of Color Press, New York, 1984)、1981年初版。
- 4 「あなたたちひとりひとりのために (For Each of You)」から。*From A Land Where Other People Live* (Broadside Press, Detroit, 1973) 初出、その後 *Chosen Poems: Old and New* (W.W. Norton and Company, New York, 1982) の p. 42 に収録。

訳注での参照文献

Black Women for Wages for Housework, 1977, "Every Mother is a Working Mother," *Safire*, 1(1): 1-3, (Retrieved January 21, 2024, <https://globalwomenstrike.net/black-women-for-wages-for-housework-bulletin-autumn-1977/>).

Chappel, Frankie, 2021, "'There Has Always Been a Black Women's Peace Movement': Women of Colour and Anti-War Activism in the U.S., 1968-1972," *Women's History Network*, (Retrieved January 21, 2024, <https://womenshistorynetwork.org/there-has-always-been-a-black-womens-peace-movement-by-frankie-chappell/>).

Cliff, Michelle and Adrienne Rich eds., 1982, *Sinister Wisdom*, (20).

伊田久美子・伊藤公雄, 1986, 「あとがき」マリアローザ・ダラ・コスタ, 伊田久美子・伊藤公雄訳, 『家事労働に賃金を——フェミニズムの新たな展望』インパクト出版会, 244-61.

Parker, Alison M., 2020, "Mary Church Terrell: Black Suffragist and Civil Rights Activist," *National Park Service*, (Retrieved February 6, 2024, <https://www.nps.gov/articles/000/mary-church-terrell-black-suffragist-and-civil-rights-activist.htm>).